

2022 年 5 月 29 日（日）「約束を通して生まれた子」

ガラテヤ 4:21-31（その 1）

21 律法の下にいたいと願う人たち、私に教えてください。あなたがたは律法に耳を傾けないのですか。

22 アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から、もう一人は自由な身の女から生まれた、と書いてあります。23 女奴隷の子が肉によって生まれたのに対し、自由な身の女から生まれた子は約束を通して生まれたのです。

24 これには別の意味があります。二人の女は二つの契約を表しています。一人はシナイ山から出て、奴隷となる子を産みます。これがハガルです。25 このハガルは、アラビアではシナイ山のことで、ちょうど今のエルサレムに当たります。エルサレムは、その子どもたちと共に奴隷となっているからです。26 他方、天のエルサレムは自由な身の女であり、私たちの母です。27 すなわち、こう書いてあります。

「喜べ、子を産まない不妊の女よ。歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。

夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもより多いからだ。」

28 きょうだいたち、あなたがたはイサクと同じように約束の子どもです。29 しかし、当時、肉によって生まれた者が霊によって生まれた者を迫害したように、今も状況は同じです。30 しかし、聖書は何と言っているでしょう。「女奴隷とその子を追い出せ。女奴隷の子は、断じて自由な身の女の子と一緒には相続をしてはならない」とあります。

31 それゆえ、きょうだいたち、私たちは女奴隷の子どもではなく、自由な身の女の子どもなのです。

【序論】

今日の箇所では4章が締めくくられますので、ガラテヤ書も3分の2が終了することになります。それにしましても、ここに来てずいぶんと難解な箇所に出会いました。この4:21-31では創世記16章の記事が取り上げられているのですが、それがパウロ独自の解釈によって説明されているのです。私自身、何度も読んできた箇所ではありますが、最初の黙想では意味不明なことが多く、「？」ばかりをノートに書き込んでいました。部分的にザラつく所が含まれている箇所はよくありますが、ここはどこを触っても凸凹の感触があります。しかし、そういう箇所を説き明かす機会が与えられることは、説教者にとってこの上ない喜びでもあるのです。ご一緒にパウロの言わんとしていることを聞き取ってまいりましょう。

【本論】

律法の下にいたいと願う人たち、私に教えてください。あなたがたは律法に耳を傾けないのですか。(4:21)

ガラテヤの信徒たちの多くが「恵み」を捨て、「律法の下」に自らを置き直してしまっただ。再び律法の奴隷となり、「～しないと救われない」という価値基準を受け入れ始めていました。そこでパウロは、それでは聖書は実際に何を語っているかを聞きなさいと、創世記の記事から説明していきます。「律法に耳を傾けないのですか」は「聖書に…」と言い換えてもよいでしょう。

本論 1. イシュマエルとイサク

アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から、もう一人は自由な身の女から生まれた、と書いてあります。女奴隷の子が肉によって生まれたのに対し、自由な身の女から生まれた子は約束を通して生まれたのです。(4:22-23)

ここで取り上げられている創世記の記事は、アブラハムの二人の妻の間に生まれた息子たちの問題です。何段階かに亘るストーリーではありますが、第一段階の所を読んでみましょう。この時点では、アブラハムはアブラム、サラはサライと呼ばれています。

アブラムの妻サライには、子どもが生まれなかった。彼女には、その名をハガルと言うエジプト人の女奴隷がいた。サライはアブラムに言った。「主は私に子どもを授けてくださいません。どうか私の女奴隷のところに入ってください。そうすれば私は彼女によって子どもを持つことができるかもしれません。」アブラムはサライの願いを聞き入れた。そこでアブラムの妻サライは、エジプト人の女奴隷ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として差し出した。アブラムがカナン地の地に住んで十年が過ぎた頃のことであつた。アブラムがハガルのところに入ると、彼女は身ごもった。ところが、身ごもったのが分かったと、彼女は女主人を見下した。そこでサライはアブラムに言った。「あなたのせいで私はひどい目に遭いました。あなたに女奴隷を差し出したのはこの私ですが、彼女は身ごもったのが分かったと、私を見下すようになりました。主が私とあなたとの間を裁かれますように。」アブラムはサライに言った。「女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがよい。」サライは彼女につらく当たったので、彼女はサライの前から逃げて行った。(創世 16:1-6)

アブラハムにとって正妻はサラでしたが、神様からはこの夫婦に子どもが与えられると約束されていました。しかし、それがいつどのような形でかは伝えられていませんでした。サラが抱えていた大きな問題は、彼女が不妊であつたことです。不妊は、当時の社

会において不名誉なことで捉えられていましたから、夫婦ともに辛い思いをしていたと思われます。アブラハムは多くの財産を持っていましたが、子孫がなければそれを相続してもらうこともできないため、これはこの夫婦にとって切実な問題でした。同時に、ここには神の祝福を誰が受け継ぐかという、より重要な問題が絡んでいたのです。

さて、神様からの約束を受けてからどれくらいの時間が経過したかは分かりませんが、おそらく数年経った頃にサラが業を煮やしたのでしょう、夫に対して一つの提案をします。神様からは子どもが与えられると言われているけれど、いつまで経ってもそれが実現しないので、これは「自分たちでできることはしなさい」と言われているのかもしれない。サラの女奴隷との間に子をもうけ、その子を法的に「サラの子」にしようという提案です。当時、子どもが与えられなかった家庭では、そういう手段で子をもうけていくことが通例でした。ですから、サラが考えたことは当時の慣習から見ておかしいことではなく、むしろ「取るべき手段」であったと言ってもよい。アブラハムも、もしかしたら神様が言われる「子どもを与える」という約束とはそういう意味だったのかもしれないと考え直したのでしょう。サラの提案を受け入れ、エジプト人の女奴隷との間に子をもうけました。その息子はイシュマエルと名づけられ、「アブラハムの子孫」となりました。この時、アブラハムは86歳であったと記録されています（創世 16:16）。

さて、サラとハガルとの間に一悶着あったものの、ひとまずイシュマエルが生まれたので「相続」の面では一安心という段階に入りました。ところが、それから13年経ち、アブラハムが99歳になったとき（創世 17:1）、神様から改めてお告げがありました。

神はまたアブラハムに言われた。「あなたは妻のサライを、サライという名で呼ばず、サラと呼びなさい。私は彼女を祝福し、彼女によって、あなたに男の子を与える。私は彼女を祝福し、彼女は諸国民の母となる。こうして彼女からもろもろの民の王たちが生まれる。」アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った。「百歳の男に子どもが生まれるだろうか。九十歳のサラが子どもを産めるだろうか。」アブラハムは神に言った。「どうかイシュマエルがあなたの前に生き長らえますように。」すると神は言われた。「いや、あなたの妻であるサラがあなたに男の子を産む。その子をイサクと名付けなさい。私は彼と契約を立て、それをその後続く子孫のために永遠の契約とする。（創世 17:15-19）

サラ自身、90歳になる自分が子どもを生むなどということは考えてもみないことでしたが、果たしてその一年後、本当に子どもを胎に宿したのです。

主は、言われたとおり、サラを顧みられた。そして主は、語られたとおり、サラのために行われた。彼女は身ごもり、年老いたアブラハムに子どもを産んだ。それは、神がアブラハムに語った時期であった。アブラハムは、サラが産んだ自分の子どもをイサクと名付けた。

(創世 21:1-3)

アブラハムの相続を巡る問題は、このような経緯を経て複雑化していきました。法的には、イシュマエルは「サラの子」であり、長男に当たるわけです。既にイシュマエルは13歳であり(創世 17:25)、もう数年経てば立派に財産を分与してもらう年齢に達します。そこに「待った」がかかったのです。何と、正妻サラが子を生んでしまった。ハガルとイシュマエルの中で激震が走ったことでしょう。アブラハムのすべての財産を受け取れると思っていたところ、邪魔が入ったわけですから。しかし、法的な意味において、女奴隷の子は正妻の子に勝つことはどうしてもできなかった。正式な相続人はイサクに置き換えられたのです。ここに、パウロが言う「女奴隷の子」「自由な身の女から生まれた子」の決定的な身分の違いがある。奴隷の身分の者は、その子孫にまでその身分が受け継がれてしまうのです。さて、このストーリーはまだ続いています。

子どもは大きくなって乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日盛大な祝いの席を設けた。エジプトの女ハガルはアブラハムに子を産んでいたが、サラは、その子が遊び戯れているのを見て、アブラハムに言った。「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子が、私の子、イサクと並んで跡を継ぐことはなりません。」この言葉はアブラハムにとって大変つらいことであった。その子も自分の子だったからである。神はアブラハムに言われた。「あの子と女奴隷のことでつらい思いをすることはしない。サラがあなたに言うことは何でも聞いてやりなさい。イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれるからである。しかし私は、あの女奴隷の子もまた一つの国民とする。彼もあなたの子孫だからである。」(創世 21:8-13)

このように、結果としてイサクはイシュマエルを凌ぎ、正式な相続人となっていく。それは、彼がまだ物心つく前に両親によって整えられた道でした。イシュマエルは可哀想ではありますが、ここに「女奴隷の子」という不利な条件が彼の人生の足を引っ張ることになりました。

ここで一点だけ補足をしておきますと、創世 21:9 で「遊び戯れている」という表現が出てきますが、それを見たサラがどうしてもそんなにも激昂げっこうしたのかという疑問があります。イシュマエルがイサクをからかっていたというのが一般的な見方ではありますが、サラの中ではイサクが相続人になれない危険性が感じられる行為に見えたのでしょう。ユダヤ教ラビの伝承の中には、この「遊び戯れる」という言葉について「イシュマエルはイサクを殺そうとして矢を放った」とか「ふざけているふりをしてイサクの方に弓を射た」という解説をしているものもあるようです。実際のところは分かりませんが、パウロはこの伝承に基づいて、29 節で「しかし、当時、肉によって生まれた者が霊によって生まれた者を迫害したように、今も状況は同じです」と言っているのかもしれない。

本論 2. 奴隷の血筋（ハガル）と自由人の血筋（サラ）

以上のストーリーを念頭に置いて、もう一度 22-23 節を読んでみましょう。

アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から、もう一人は自由な身の女から生まれた、と書いてあります。女奴隷の子が肉によって生まれたのに対し、自由な身の女から生まれた子は約束を通して生まれたのです。

ここではイシュマエルについて「女奴隷の子が肉によって生まれた」という言い方がなされています。「肉」という言葉にはネガティブなニュアンスが含まれています。（イシュマエル自身に罪はないのですが）ここでは「アブラハムとサラのあくまで人間的な思いと計算によって生まれた子」という意味が伝えられています。神からの約束に基づかないところでイシュマエルは生まれてきた。それゆえに、神の祝福を受け取る権利が与えられなかったということです。

一方、イサクについては「自由な身の女から生まれた子」と言われています。旧約聖書の中で、サラについて「自由な身の女」と言われている箇所は他にありません。これはパウロ的解釈であり、アブラハムの正妻として何の縛りも受けていない身分であることを言い表しているでしょう。その身分を持っているだけでとてつもない特権にあずかっているのであり、サラから生まれてくる子どもにまでそれは受け継がれるのです。

一言申しますと、サラは美しい人であったようではありますが、その人格において輝く人であったかという点、そうとは思えない記事で満ちています。しかし、神の祝福は彼女の人格云々とは無関係に注がれている。これが「恵み」というものなのでしょう。むしろ、人間的に見て可哀想なのはハガルとイシュマエルであり、彼らこそアブラハムに家から追い出された人々でありました。しかも、ハガルがイシュマエルをもうけたのも、サラの願いを受けてのことでしたから、批判的に読むならば、アブラハムとサラが行なったことというのはどれだけ恨みを買われても仕方のないことと言えます。

しかし、「神の祝福の継承者」という問題に取り組んでいくとき、聖書はこの点で一切の妥協をしないのです。あくまでも、神が下された約束に基づいて歴史は進んでいく。神の約束は、人間の人格的に優れた面だとか、先に生まれたとか、そういったことをはるかに超えたところで、ただ恵みによってイサクに受け継がれていきました。イサクは生まれつき「自由」を持った人なのであり、「神の祝福の継承者」であることを誰にも止めることはできなかったのです。

以上のことを通して、パウロはガラテヤの読者に何を伝えようとしているのでしょうか。それは、彼らにもイサクと同様の恵みが与えられているということです。彼ら自身には人間的に誇るどころは何もないけれど、ただ信仰によって「神の国の相続者」とされたのです。そして、神を父と呼ぶことのできる、まことに自由な関係が与えられている。それは、彼らが律法を持っていなかったとしても、誰にも動かすことのできない身分として与えられた特権でした。「この特権を今になって手放すのか！」とパウロは叱責しているのです。

【結論】

今日は 23 節までとし、24 節以下の入り組んだ内容は次回説明させていただきます。まず前提として、イサクとイシュマエルの出生における動かしようのない身分の違いを心に留めたいと思います。そして、私たちも信仰によってこの系図に加えられているという事実を覚えたい。私たちも自らを「奴隷化」していく危険性を常に持っている存在です。「罪と律法の奴隷」になりやすい。救われる前に持っていた悪習慣に戻って行こうとしていたら、それは不自由な道を選択しているということになります。また、福音に基づかない価値観に心縛られていたとしたら、それは何らかの意味で「律法の奴隷」になっている可能性もあります。神の御前における自由の道というのは、日々を選択していくものであり、それを教えてくれるのは私たちに救いを与えてくださった聖霊、内住の御霊であります。

【祈り】

恵みの神よ。人の救いが自分の義の業に基づくものでないことを感謝します。あなたがアブラハムにお与えになった約束によって、イサクは相続者となりました。同様に、罪深い私たちにも無条件の恵みが与えられています。あなたとの自由な関係に入れていただいたことを感謝いたします。罪と律法の奴隷としてではなく、赦された者としての解放された人生を歩ませてください。自ら奴隷の轡を負うような生き方に舞い戻ることがないようにお守りください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

アブラハムに信仰を与え、相続者イサクにも義を受け継がせ給うた、父なる神の愛、
信仰の系譜より生まれ、ご自身に結びつく者を神の子となし給う、主イエス・キリスト
の恵み、

罪と律法の奴隷の軛を打ち砕き、神を愛する自由に生かし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。